

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	VAN STEENPAAL Niels
論文題目	近世中期における「孝子顕彰」の研究－「道德文化」史の構想－		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近世中期の「孝子顕彰」の分析を通じて、「道德文化」史という構想を切り拓こうとする研究である。「道德文化」史とは、「道德」を主に「道德思想」の観点から扱ってきた従来の日本近世思想史研究に対抗的に提起した構想である。テキストの中に見出される「道德」思想の内容を問うこれまでの「思想」史ではなく、「道德」は「個人」と「社会」との間でなされる「交渉」の過程に着目する「文化史」的な視点が、「道德」が近世に果たした歴史的役割を理解するには、不可欠であると考えからである。</p> <p>近世の「道德文化」考察のため、本論文が着目する主題は、近世中期における「孝子顕彰」、すなわち「孝子」を「創作」する行為の流行である。従来の研究は主に「孝子伝」という文学ジャンルに着目しながら、長らく「孝子顕彰」の意図を「教化」に求めてきた。それに対して近年異を唱えて、「孝に対する関心」と曖昧な点に認める研究も現れたが、「孝子顕彰」の流行を「孝に対する関心」というだけでは、説明として成立していない。そこで、本論文は、「孝子顕彰」の過程を多面的に検討する。そのことを通じて、その背景にある「孝に対する関心」の志向性と歴史性を解明している。その志向性は、直接的に「孝」にあったのではなく、「孝」「孝子」を媒介とする「自己表象」にあったことを明らかにした。また「自己表象」を志向するその歴史性は、十八世紀の商品経済の発展にともなう「社会」変容に対応するため、「個人」が「自己」を適応させる願望の高まりにあったと論じている。</p> <p>本論文は、「はじめに」と序章で問題意識・課題・方法・史資料を説明し、五章を立て、結論にいたる。第一章では「孝子顕彰」の基盤が村にあることを見出した。「孝子」と「村」・「村役人」・「孝子訪問者」と三者の関係設定において、「モノ」をめぐる人々の行動を検討して、「村」の「孝子」「創作」の背景に、「孝子」に「由緒」(個人や集団のアイデンティティとそれを正当化する権威)としての「価値」を認める(求める)志向があったことを論じている。</p> <p>第二章では、「孝子」と「訪問者」との関係設定の問題を継承して、「孝子」万吉が旗本などの「訪問者」によって、「孝子」として「創作」され、その名声が広まった具体的な過程を解明した。さらにそれを踏まえて、「孝子顕彰」は、「訪問者」にとって、自分の「志」を文芸的に顕す「自己表象」を「同志」で共有することが可能な「場」としての意義があったことを指摘している。</p> <p>この「場」における「志」の内容を詳細に解明したのが、第三章であり、「孝子顕彰」の思想構造の解明を課題としている。龍野の孝婦「よし」を称賛して詠まれた詩歌集を分析し、その思想構造が「天性」「教化」「風土」という三要素からなることを明らかにした。</p> <p>顕彰に参加した人々は、「自己」をこの構造の中に位置づけることによって、「孝子」の問題を道德・政治・地域に基づく「自己表象」として展開させており、その「表象」は藩儒により「藩」レベルにまで拡張されたことを示している。</p>			

(続紙 2)

この「藩」による「自己表象」がいかなる空間においてなされたのかを、第四章で説明する。諸藩で編纂出版された「孝子伝集」十二部の比較分析を通じて、「藩」による「自己表象」は常に他藩を意識しそれと対抗的かつ競争的に形成・展開された「言説」であったこと、またその「言説」の端緒が、元禄期に編まれた『本朝孝子伝』であったことを論証している。

第五章は、もっとも注目されてきた幕府の編纂出版になる『官刻孝義録』を取り上げる。従来それは、社会風俗を正す「教化」政策と位置づけられたが、本章では、それが藩の「自立化」を支えた明君「言説」を、幕府の傘下で一元的に統合すること、それによって衰えてきた幕府権力と権威を復権させようとする企画であったことを論じている。

結章は本論文の論点と結果を整理している。「孝子顕彰」という行為の実態や歴史的意義を検討することを通じて、人々の「孝に対する関心」の背景にある人々の多様な願望を浮き彫りにした。近世中期における「孝子」という存在は、そういった願望が「表象」されたものであり、「個人」と「社会」を結ぶ媒介であった。「道徳」をめぐる文化的な多義性とメディア性の発見は、従来の「道徳」研究を批判的に克服し、「道徳文化」史構想の有効性を示していると結論づけた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

近世中期(18世紀)に「孝子伝」を編纂・出版して「孝子」を「顕彰」する文化的活動が盛行した。先行研究では、この文化現象を民衆に対する道德教化として説明してきたが、本論文はこの通説を批判して、「孝子顕彰」が、多様な「場」と「主体」に即して、多様なメディアを通じてなされてきた多面的な事実過程を解明し、それを表象文化論的な観点から意味づけ、「道德文化」史として展開してみせた。

本主題の問題設定の的確さ、方法論の自覚的検討とその新しさ、関係する先行研究の目配りの良さとそのレビューおよび問題点の指摘、第一次史料を求めての可能な限りでの渉猟とその史料批判の周到さ、近世史料解読の的確さ、具体的事実の検証の手堅さ、小さな事実を大きな論脈に関係づける論理構成の緻密さ、そして全体の論文構成の確かさなど、いずれにおいても本論文は完成度が高い歴史研究として高く評価できる。

なかでも本論文は、以下の点を達成したとして評価できる。

1, 本論文は、方法論的に明確な自覚をもって取り組まれた研究である。1980年代の「言語論的転回」以後、記述された「客観的事実」にもとづいた歴史学のあり方が問われ、「事実」を示す「表象」のあり方自体を読み解いていく「表象文化論」が新たな潮流となって来たが、本論文はこの視点を自覚的に取り込み、思想的テキストの内容を思想主体に回収する方向で読み解いてきたこれまでの思想史研究や、すぐれた芸術や文学の作品群を対象としてきた旧来の文化史に対抗して、「新たな文化史」の構築を目指し、高いレベルでの成果を出している。それはきわめて挑戦的意欲に満ちた研究であると評価できる。

2, 「孝子」は「孝子」として顕彰されて初めて「孝子」となる。つまり「孝子」は自明の存在ではなく、何者かによって文化的に創り出される。この点を確認して展開する本論文は、この「孝子」創出の事実過程に焦点をあて、博搜した史料を駆使して、具体的かつ詳細に、明らかにした。本論文によって初めて明らかになった事実は少なくない。しかも「孝子」創出に主体的に関わった多様な人々のそれぞれの主体的な意図とその行為の意味を、表象文化論的観点から読み解くことによって、教化に回収してきたこれまでの通説を、説得力をもって批判することに成功している。この点は、本論文の特筆される成果である。

3, 「孝子」創出をめぐる文化過程を、多面的な側面から解明した。

たとえば「孝子」創出は村を基盤としてなされたことを突き止め、褒賞された「孝子」の「由緒」としての価値を、村のアイデンティティ構築に見出し、それが歴史的アイデンティティを求めた「由緒の時代」という同時代の文化動向と軌を一にすることを明らかにした(第一章)。また「孝子」宅を多数の旗本やさまざまな文人が訪れ、そこに孝子を顕彰する無数の和歌や漢詩などの文芸作品が張り出されていたという事実を明らかにして、それらの文芸作品群は、訪問者たちの「志」を「自己表象」として表明することで一種の政治的文化的共同体を構成しようとする行為であったと意味づけた(第二章)。また藩儒による孝子伝編纂を、藩という領域の道德的・政治的・地理的なアイデンティティ構築の「自己表象」と意味づけている(第三章)。あるいは諸藩での孝子伝編纂出版が藩国家の「名君=仁

(続紙 4)

政」競争意識にもとづくこと、それが藩の国家的自立の「自己表象」であったと意味づけたこと(第四章)、さらに幕府による『官刻孝義録』全50巻の編纂・出版が、自立に向かう諸藩の「藩国家」自立化の動向に対抗した幕府の中央統一権力としての威信回復の事業であったと、実証的論理的に説得力をもって論じている(第五章)。

いずれも「孝子」をめぐるさまざまな文化表象にこめられた、多面的な意図を解明しており、これまでの道德思想史や政治思想史を新たな「文化史」のもとに塗り替えることに成功したと評価される。

4、「道德」を主題として取り組むことで、近年の研究で敬遠され手薄になって来た主題に「新たな文化史」の立場から再び光りをあてた。それは、「道德」を視野から外せない教育史や思想史の研究に大きなインパクトをもって貢献することになる。また近世中期の「孝子顕彰」現象を、民衆教化として説明してきたこれまでの教育史はもとより、政治思想史や道德史の研究を塗り替え、今後は必ず言及される意味において、画期をなす成果を達成したとみることができる。

とはいえ、問題点もないわけではない。

「道德」を、社会からの外的強制と個人の内的規範の「交渉」とらえる「道德的交渉」という独自の問題設定において、「個人」と「社会」の二分法がその境界線も危ういあいまいな概念設定であること、本論における多面的な分析が、結局孝の顕彰それ自体より、それを表象する主体の「自己表象」に回収されるという結論よりも、それぞれの表象の仕方における特質こそに意味を見出すべきではないか、という指摘もなされた。また「孝道德」はすぐれてイエの問題と関わるが、その視点からの考察の欠落も指摘された。

しかしこうした問題点は、いずれも本論文の欠陥を示すものではない。挑戦的に取り組まれた本研究に、いずれも事後的に見出された課題であり、今後のさらなる発展に向けた期待である。こうした指摘は、博士学位論文としての本論文の価値を減ずるものではないと認められた。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成24年2月27日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認められた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降